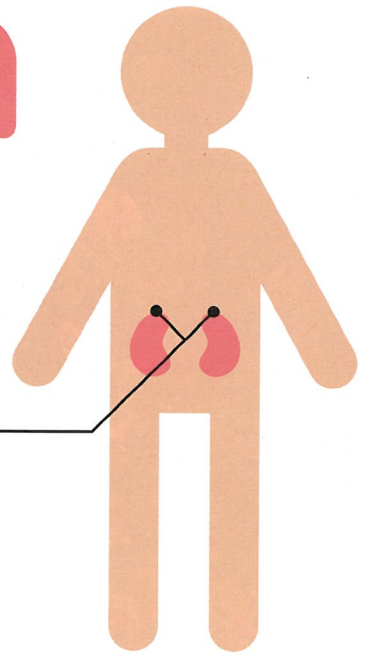


臓器のはなし



今月は 副腎

ホルモンをつくり 身体の機能を整える

腫瘍(がん等)によって
ホルモン異常に

副腎とは、左右2つの腎臓の上の帽子のように乗っている2〜3cm程度の小さな臓器です。あまり馴染みがないでしょう。名前や位置などから、腎臓の付属的なものと思いかもしませんが、多様なホルモンを生み出す大事な役割を担っています。

構造的に副腎は、表面の皮質、内部の髄質という2部分に分かれています。皮質からは血糖値や血圧を高めたりするホルモンの一種、コルチゾールなどが分泌されます。髄質からは、脳や腎臓といった臓器の血流調整に重要な役割を果たすホルモン、カテコラミンなどがつくられます。

これらのホルモンは、正常なら体内で濃度が一定に保たれ、過剰になったり不足したりしないように分泌量が調節されます。しかし、調節が利かなくなるとホルモンの分泌量が多すぎたり、少なすぎたりするという両方の病気があります。

極端なホルモン量の異常が認められる場合には腫瘍の可能性ががあります。腫瘍とは細胞が過剰に増殖してできる組織の塊で、良性と悪性があり、後者は主に「がん」を指します。

異常を調べるには
大病院、専門医へ

コルチゾールが過剰につくられて起こる代表的な病気が、クッシング病です。肥満や高血圧などで、糖尿病を誘発します。一次性と二次性があり、副腎自体が腫瘍になって、ホル

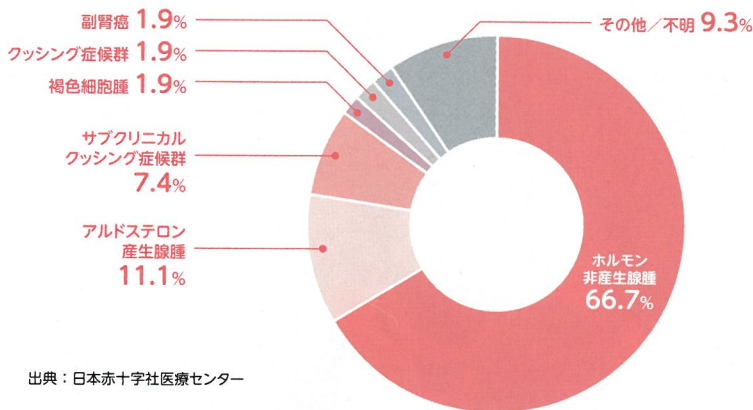
モンを過剰につくるのが一次性。脳下垂体から分泌されるACTHというホルモンが刺激を与えることで、副腎からホルモンが出すぎる病態を二次性と呼んでいます。

逆にホルモンが出なくなってしまう病気の代表格は、アジソン病。原因としては遺伝などの先天的なものもあれば、かつては「国民病」と恐れられた感染症である結核が引き起こすこともあります。罹患すると衰弱し、肌の色がやがなくなります。血圧と血糖値も下がり、シヨック状態に陥ってしまうケースも…。

またカテコラミンが出すぎる分泌異常では褐色細胞腫という病気があり、やはり高血圧などの症状が見られ、糖尿病を併発します。

これらは難病ではあるものの発症頻度はかなり低く、人間ドックでもエコーで腎臓と一緒に診ることはありませんが、見つけにくいといわれています。該当する症状がありながらも病名がはっきりしない場合などは、かかりつけのドクターと相談し、大病院や内分泌科専門の病院でCT(コンピュータ断層撮影)や超音波検査(エコー)で調べてください。

副腎疾患(副腎腫瘍)の内訳



出典：日本赤十字社医療センター

監修

浅海 直
あさうみ すなお
(医療法人社団 平成医会 産業医)



1993年千葉大学医学部卒。2007年12月まで松戸市立福祉医療センター東松戸病院(内科副部長)、2008年1月より板橋区役所前診療所に勤務。専門分野は糖尿病、脂質異常症、甲状腺疾患等の代謝・内分泌疾患および老年医学。